

## 豊田市学校図書館司書インターンシップ ——活動評価と今後の課題——

### Toyota City School Librarian Internship: Activity Evaluation and Future Tasks

中西 由香里\*, 伊藤 真理\*\*

Yukari NAKANISHI, Mari ITOH

#### 要 旨

本稿では, 2015年4月から豊田市教育委員会と愛知淑徳大学が連携して開始した, 学校司書養成に特化したインターンシップの活動について「学校司書モデルカリキュラム」を参照し, 評価と課題を整理したものである。インターンシップ研修生の実習報告書の分析結果から, 愛知淑徳大学生を対象とした場合, ICT機器を活用した学習や各教科等に必要資料提供に対応できることが明らかとなった。一方, 児童書についての学習に課題が見られたため, モデルカリキュラムも含めた検討が必要であると考えられる。

キーワード: 学校司書, 学校司書養成, 豊田市学校図書館, 豊田市教育センター

#### 1. はじめに

本稿では, 2015年4月から豊田市教育委員会と愛知淑徳大学が連携して開始した学校図書館司書(以下, 「学校司書」)養成に特化したインターンシップの活動を評価し, 今後の課題を整理するものである。豊田市教育委員会では, 改正学校図書館法に伴い学校司書の配置や現職学校司書の資質向上の充実が必要と考えている。これは市内の学校からの配置人数に対する要望もふまえての認識となっている。そのために学校司書増員の必要性を検討しているが, 解決すべき喫緊の課題として, 現職学校司書の円滑な世代交代に加え, 電子資料を含む多様な資料にアクセスできる環境を整え, 利活用に対応できる学校司書が必要である。その解決策の1つとして, 図書館情報学を学ぶ学生を対象として実践的な研修を実施し, 後継者を育てることが計画された。この学校司書養成プロジェクトは, 今年で4年目を迎えた。そこで, 過去2年間の活動を振り返り, 活動を評価し今後の展開を検討する。なお, 1年目のプロジェクトが実施されるに至った経緯については, 「愛知淑徳大学人間情報学科における学校司書養成への取り組み」(伊藤, 2016)を参照されたい。

\* 文化創造研究科図書館情報学領域 博士後期課程

\*\* 人間情報学部

## 2. 学校司書養成をめぐる変化

学校図書館をめぐる変化は、2014年の「学校図書館法」改正にあると考えられる。2014年3月「これからの学校図書館担当職員に求められる役割・職務及びその資質能力の向上方策等について(報告)」が公表された。この方策は、教育課程全体や各教科等の学びを通じて児童生徒の育成に学校図書館が果たす役割が大きいことから、学校図書館の利活用の意義について示し、学校図書館担当職員の役割・職務についてまとめたものである。2015年には「学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議」(文部科学省, 2015)が設置された。学校図書館の運営に関わること、学校図書館の現状や今後の望ましい在り方等について議論がなされた。その成果は、2016年10月に「これからの学校図書館の整備充実について(報告)」として取りまとめられ、この報告をふまえて文部科学省は「学校図書館ガイドライン」を策定している。同年、学校司書の資格・養成に関する考え方として、「学校司書モデルカリキュラム」が公表された。さらに、2017年3月公示の学習指導要領総則には“学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かす”(p. 91)ことも明示されている。これは、児童生徒の言語活動や情報活用能力の育成において、教員が学校図書館を利活用する学習方法が有効であることを示したものと理解できる。また、中央教育審議会による「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申)」(以下、「チームとしての学校」)(中央教育審議会, 2015)が発表され、教師一人一人が持っている力を高めるとともに、限られた時間で専門性を発揮できるようにするために学校内での専門性に基づくチーム体制の必要性が示された。ここで示された専門性に基づくチームの中に学校司書も含まれている。つまり、「チームとしての学校」は、上述の学習指導要領に対応した指針が提示されたということになる。

学校図書館の教育環境では、「教育振興基本計画(閣議決定)」(文部科学省, 2018)において“義務教育諸学校に新たな教材整備計画等に基づく教材の整備を推進する”(p. 86)ことを公表した。この計画では、司書教諭の養成や学校司書の配置に対する学校図書館の整備充実を図ることが盛り込まれている。こうした教育計画により、「学校司書モデルカリキュラム」に基づいた学校司書養成が始まっている。学校司書養成についての、2009年から2017年前半までの図書館情報学教育、図書館員養成教育に関する最新の動向については、「図書館員の養成と研修」(川原, 2018)を参照されたい。これからの学校司書は、各教科学習等に必要な資料や情報を提供することはもとより、情報機器の導入をふまえてのデータベース化・ネットワーク化の推進等、電子資料を含む多様な図書資料にアクセスできる環境を整備できる人材として求められているといえよう。このようにこれからの学校教育では、単に知識を伝達するだけでなく人と人との関わり合いの中で学び合う、場としての学校図書館機能を発揮していくことが求められている。

その一方で、進展する情報技術には大きな可能性もあり、学校教育に取り入れていくことが必要である。そこで、「Society 5.0に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」(Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース, 2018)において、先端技術の活用によりすべての児童生徒に対して質の高い教育を実現することが公表された。Society 5.0の到来を見据え、“基礎的読解力、数学的思考力などの基盤的な学力や情報活用能力を、すべての児童生徒が習得できる”(p. 19)学校の指導体制の確立が重要になるとされている。こうした指導が着実に実施されるために、小学校高学年における専科教員の配置なども検討されている。加えて上記報告書において、“中学校・高等学校でも技術科、情報科のような特定教科の免許状を保有する教員が少ないことをふまえ、指導体制の質・量両面にわたる充実・強化を図る”観点から免許制度の在り方を見直すことが提示された。

本稿では、上述の学校司書や学校図書館をめぐる検討課題を背景として、研修の内容を研修生による実習報告書から分析して「学校司書モデルカリキュラム」を参照しながら、今後の研修内容の在り方へ反映させたい。新しい学習指導要領を念頭におき、司書課程を履修している研修生が各教科学習等に必要な情報や資料を提供することができるか、先端技術の導入によりデータベース化、電子資料を含む多様な図書資料を管理できるか

プログラミング教育等、情報メディアを利活用した授業に対応できるかという観点から検討する。

### 3. インターンシップ概要

#### 3.1 インターンシップ実施方法

豊田市教育センター（以下、「TEC」）では、インターンシップの受け入れにあたり、毎年4月に効果的な支援方法や具体的な研修計画を確認するため、TECで事前オリエンテーションを行っている。インターンシップ終了後には、愛知淑徳大学（以下、「大学」）で、毎年度末にTECの指導主事と大学担当で、来年度に向けた研修計画の見直しや今後の課題について検討を重ねている。

インターンシップ受け入れ校は熟練した学校司書の担当校で行い、インターンシップ受け入れ校は以下の3点が整っている学校とした。

- (1) 学生が通うことが可能な公共交通機関がある学校
- (2) 指導の担当が可能な学校司書が勤務している学校
- (3) 充実した図書館運営がなされている学校

研修活動範囲と期間については、当プロジェクトでは全期間中、研修生は学校司書の指導のもとに活動することになっている。活動場所は、指導担当の学校司書が業務を担当している豊田市の小中学校図書館を原則としている。2016年と2017年の研修は、T小学校で実施された。T小学校の特色は、小学校とこども園が隣接していることに加え、地域学校共働本部も敷地内に開設されている。2階には小学校とこども園を繋ぐ共有スペースもあり、絵本や紙芝居の書架がおかれている。また、校内には2つの図書館があり、1つは低学年の教室近くにある。もう1つは、タブレット端末と図書資料が一体化したメディアセンターとして校内の中央に位置している。メディアセンターは明るく開放的で、バリアフリーになっている。

研修は原則1年間の実施である。2016年度は5月～11月まで10回実施され、2017年度は5月から1月まで12回実施された（具体的な内容は次節参照）。1回の研修では、終日活動に従事することになっている。これは、学校司書による学校での1日の業務活動全体を見ることで、学校司書がどのように児童生徒と関わることかを把握できるようにという意図がある。

インターンシップ研修生は、以下のような条件のもとで選定された。その結果、2016年は4年生2名、2017年は3年生2名が研修生として派遣されることとなった。

- (1) 人間情報学部学生であること
- (2) 募集は2名程度
- (3) 司書課程科目を履修している3年生以上
- (4) 図書館や学校教育に高い関心を持ち、子どもとのコミュニケーションが円滑にできること

#### 3.2 インターンシップ研修内容

研修内容については、TECの指導主事と指導にあたる担当司書が、学校司書の業務内容から学生に必要と考えるものを選び、インターンシップの活動として構成した。2015年度の活動内容の詳細については、「学校司書養成プロジェクトの活動と評価—豊田市学校図書館におけるインターンシップ—」（中西、2016）を参照されたい。研修カリキュラムの内容は、「インターンシップ研修のしおり」に依拠して行う。インターンシップ実施は、「学校司書モデルカリキュラム」考案前であったため、モデルカリキュラムを意識するというよりも、受け入れ校の図書館の状況によって臨機応変に対応している。研修では学校に慣れることから始め、徐々に学校図書館の業務や授業支援を含む教育活動を行った。2016-17年度の詳細な活動内容については別途資料編で示した。2016-17年度でのインターンシップ研修のしおりに記す活動項目は表1に記した。

表1 インターンシップ研修のしおりに記す活動項目

活動項目	活動内容例
(ア) 学校司書から学ぶ	カウンター業務, 環境整備, 授業支援, 教材支援, ボランティアさんコーディネート
(イ) 学校司書の仕事を知らう	本の修理, 蔵書管理, 廃棄, ブックコートかけ, 発注準備, お便り作成, 資料登録, 逐次刊行物整理, 統計
(ウ) 担当した学校図書館の特徴を知らう	
(エ) 環境整備をしよう	展示, コーナー作り, POP 作り
(オ) 読み聞かせをしよう	本の選書を考える
(カ) 授業を参観しよう	授業の様子を参観する
(キ) 中間面接	KPT 法のフォーマットを用い, これまでの活動報告と今後の改善点について振り返りを行う Keep: 研修を通して大切にしたいこと, 継続したいこと Problem: 研修を通して難しかったことや改善したいこと Try: これからやってみたいこと
(ク) 学校図書館の裏方としての仕事	
(ケ) 子どもとのコミュニケーションについて考える	
(コ) 公共図書館でのレファレンス研修	
(サ) 研修を振り返って	「学校司書の仕事」についての振り返り

2016-17年度では, 2015年度の研修計画を見直し, 研修生の学びを深める取り組みとして次の2点が改善された。1つ目は, 研修生自らが毎回目標を掲げて活動すること。2つ目は, 活動の第5回で設定されている中間面接で, 後半の研修に向けての挑戦的な目標を立てて活動することである。この中間面接では, 研修生と学校司書の研修に指導主事が加わり, KPT法を用いてこれまでの活動内容の振り返りが行われた。このように, 研修生は学びを深めるために毎回自らの目標を掲げた活動を振り返り, 各回終了後に実習報告書を作成した。当該報告書は, 研修担当学校司書, 指導主事, 研修受け入れ校校長, 大学担当教員が確認した。

#### 4. 実習の分析

上述のように研修生は, インターンシップ研修にあたり毎回自ら目標を掲げ活動に取り組んだ。研修生は学びを深めるために各回の研修の振り返りを行い, 実習報告書を提出した。本章では, 学校司書に必要とされる能力について2つの方法から分析した結果について述べる。4.1では, 研修生が記録した気づきを筆者らが「学校司書モデルカリキュラム」を参照し, 学校司書に必要とされる知識を念頭に分析した結果について述べた。4.2では, 研修生の教職課程履修の有無と学校司書に必要とされる能力との影響について記した。

##### 4.1 実習報告分析の結果

当該インターンシップ活動は, モデルカリキュラムなどの何らかのガイドラインに沿っているわけではないため, 分析では予めカテゴリーを設定していない。研修生が毎回研修後の振り返りとして書いた実習報告書をもとに, 筆者らが「学校司書モデルカリキュラム」を参照し, 内容分析の手法により, 研修生の気づきをキーワードもしくはフレーズで抽出して, 意味内容の文脈ごとにコーディングを行った。意味内容の類似性にしたがってカテゴリーに分類し, その結果6つのカテゴリーを抽出することができた(表2参照)。その分類が表す内容をカテゴリー名とした。加えて, 2016-17年度の研修の改善点である中間面接での, 研修生が目標を掲げた活動内容と最終研修日に「学校司書の仕事」についての振り返りを行った内容も対象とした。

表2 学生が必要とした学校司書の資質能力

カテゴリー	学校司書に必要な資質能力
授業支援への対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各学年、各教科の授業内容の理解</li> <li>・各教科の単元に沿った資料提供と資料評価</li> <li>・TTで授業をする技術</li> <li>・各学年の授業内容に沿った展示</li> <li>・広い視野での資料収集</li> <li>・資料に対する知識</li> <li>・教員との授業の打ち合わせ、連携</li> <li>・児童の発達段階を理解した選書と資料提供</li> <li>・プログラミング等、ICTに関する知識</li> <li>・児童の目線に立ったワークシート</li> <li>・課題解決への貢献</li> <li>・幼小連携の重要性理解</li> </ul>
業務改善の必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人職場、大量な業務量の処理</li> <li>・常駐勤務でないことによる、教員との調整</li> <li>・業務の効率を図るための実践</li> <li>・適正な資料管理</li> <li>・相互貸借の効率化</li> </ul>
司書に必要な知識確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料の評価</li> <li>・児童の目線に立った支援</li> <li>・図書館情報学の知識</li> <li>・レファレンスに対応できる資料の知識</li> <li>・利用者に適切に対応する技術</li> <li>・資料を紹介できる多くの知識</li> <li>・書架整理における規則や法則の知識</li> <li>・発達年齢を理解した選書</li> <li>・地域に関連した郷土本の管理</li> <li>・電子資料を用いた障害のある子どもへの対応</li> <li>・児童書の知識</li> <li>・展示方法の工夫</li> <li>・利用者に検索方法を伝える技術</li> <li>・書誌データの作成</li> <li>・状況に応じて対応</li> </ul>
児童に対する気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・場としての学校図書館</li> <li>・児童に共感する力 (興味をもったことを調べていたり、児童同士で本を探している時の見守りなど)</li> </ul>
児童への対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料に興味をもちやすくする工夫</li> <li>・児童に伝わる言葉</li> <li>・児童への声のかけ方</li> <li>・児童との距離の取り方</li> <li>・児童間での話題や友人関係</li> <li>・視覚に訴える展示の工夫</li> <li>・児童の身近に本を置く効果</li> </ul>
地域連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学外関係者との円滑なコミュニケーション</li> <li>・適切に作業を進めるための調整能力</li> <li>・専門的なことをわかりやすく説明できる力</li> </ul>

まず表2に示した1年間を通した活動での気づきについて述べ、次に中間面接での、研修生が目標を掲げた活動内容と最終研修日に「学校司書の仕事」についての振り返りを行った内容について述べる。

### (1) 1年間を通した活動での気づき

表2のカテゴリーは、研修生が必要だと感じた学校司書の資質能力であると考えられる。研修生は、教員と学校司書の間でしっかりと意思疎通を図ることで質の良い授業支援に繋がると感じている。また、資料を活用した幼小連携に向けた1年生の読み聞かせの授業では、資料（「おおきなかぶ」の絵本）を提供したことで児童の主体性や興味などを出す補助ができると感じている。さらに、学校司書とのTTの授業を見学した際に、教員の動きを観察して学校司書が関わることで教員が児童の様子を見る時間ができていることや、児童の集中力が再びあがることを感じている。このような雰囲気の違いは実際に授業を見学しないとわからないため、学校司書が授業支援することの意義をまた別の視点で感じる事ができたと思われる。

ICTを活用した授業に参加した記述では、学校司書としてICT能力を使用した授業支援がどのようにできるかイメージすることができ、学校司書がICTの技術を習得することで授業支援の幅が広がり、より児童が情報を扱えるような業務ができると感じていることがわかった。

1年生の学年文庫の選書体験では、児童の発達や興味、関心を意識した選書をする事が重要であると感じている。また、児童の目線に立った文字の大きさや字体、色など年齢に合わせた配慮が必要で、障害のある子どものためのDAISY図書（児童書の電子書籍）の取り組みも重要と考えていることが明らかとなった。

中央図書館でのレファレンス体験では、利用者に声をかけるタイミングの難しさに加え、レファレンス質問に対応できる能力が必要と感じている。発達年齢に沿った児童書の知識や適切に資料提供、資料評価ができる能力が必要であることが明らかとなった。

研修生は、図書館でのフロアワークを通して、本を返しに来た子、本を借りに来た子、本を読みに来た子、友だちと交流しに来た子など様々な目的を持って図書館を訪れる利用者を支えるのが学校司書であり、児童の支えとなる存在と感じた。こうして児童たちとふれあうことで、児童間での話題や関係、知らなかった児童の一面などを知ることができ積極的に接することが大切だと実感している。学校司書には、場としての図書館を支えることができる、児童の活動を見守る力も必要であると感じていることが明らかとなった。

書架の整理では、受け入れの古い本の請求記号の誤りが多く見付き、規則をよく理解した司書の勉強をした人でなければ、なかなか気づくことができないため、学校司書が図書館を管理することの必要性を感じた。これらの作業は利用者の資料の探しやすさ、利用度などにも直結するため、学校司書が在駐していない学校図書館はこういった図書館機能の根幹に関わる書籍の管理すらできていない可能性があると感じてきたと思われる。

地域連携での活動として、地域学校共働本部の協力のもと低学年図書館の整備を行った。ボランティアの方に分類や配置の仕方など、専門的なことをわかりやすく説明することは難しく、ボランティアの方々とのコミュニケーションをとることが大切であることに気づく結果となった。

### (2) 中間面接での振り返り

中間面接では、KPT法のフォーマットを用いて、これまでの活動と今後の改善点について振り返った。結果は、テーマ展示、児童とのふれあい、児童への対応の仕方、ブックコートのかけ方、読み聞かせの実演、学校司書の仕事、において重要と思われる気づきがあった。

K：子どもとの関わり方、ブックコートのかけ方、学校司書の仕事理解、授業への参画

P：授業支援が難しい、選書が難しく本の知識が必要だと思った、公共図書館の勉強はしているが学校図書館への授業支援の授業が少ないため単元に沿った本を選ぶことが難しかった、児童書の知識が足りないと思った、業務の時間配分や児童への対応の仕方に戸惑った

T：児童書の知識を身につけ本の選書ができるようにしたい、ブックトークや読み聞かせ体験をしたい、学校を理解することから始め他の学校の図書館も見学したい、展示に挑戦したい

(3) 最終研修日での振り返り

最終研修日の「学校司書の仕事」についての振り返りでは、研修を通して研修生が疑問に思ったことについてのまとめであった。第1回目の「学校司書の仕事を知らう」の説明の中では、「学校司書になるためにはどうすればよいですか」という研修生からの前向きな質問で始まったが、研修最終日での振り返りでは、勤務状況について「学校司書は誰を対象にしている仕事ですか」と質問に変化が見られた。研修生から「学校司書は職業として就職に繋がらない」との冷やかな声が寄せられている現状を示している。

以上、研修生が必要だと感じている学校司書の資質能力では、学校司書としてICT技術の習得も含めた専門的知識に加え、積極的なコミュニケーション能力が必要であると感じていることがわかった。その一方で、発達年齢に沿った児童書の知識が不足しているといった課題も明らかとなった。

4.2 教職課程履修の影響

本節では、2016-17年の研修生を対象に、学校司書に必要とされる能力について教職課程履修の有無との関連から検討を行った。2017年度は、2016年度の結果をより確かなものにするために2016-17年度の研修生の報告書をもとに検討したが質問紙調査は実施していない。ここでの調査は2つの方法を用いて両者の関連を分析した。1つ目は、2016年度の研修生に対して行った学校司書に必要とされる能力についての質問紙調査である。2つ目は、2016-17年に参加した研修生4人の活動報告書をもとに、筆者らが研修生の気づきをキーワードもしくはフレーズで抽出した。児童の育ちを意識した意味内容の文脈ごとにコーディングを行い、カウントした数から司書課程のみ履修している研修生と司書課程と教職課程を履修している研修生の傾向についての検討を行った。以下の表3は、2016年度の調査結果である。2016-17年度の結果は、本文の中で記す。なお、記述では、2016年の学生を研修生A、研修生Bとする。2017年の学生は研修生C、研修生Dとする。A研修生は司書課程のみ履修し、B、C、D研修生は司書課程と教職課程（情報）を履修している。

まずはじめに、2016年度に実施した調査結果から述べる。2016年に参加したA、B研修生を対象者として、学校司書に必要とされる能力について質問した結果を表3に示した。なお、A研修生、B研修生の共通点は○、異なる点は△で記した。共通点は、司書としての知識、コミュニケーション能力、レファレンスに対応できる能力であった。異なる点は、細やかな配慮、向上心と応用力、視野の広さ、責任感、子どもと教育に携わる自覚、子どもの目線に立って物事を見る能力、子どもの接し方などの知識、経験、子どもの言葉を聴き理解する力であった。B研修生においては子どもを育む気づきがA研修生に比べ顕著に見られた。

表3 学校司書に求められる力

A 研修生：教職履修無	B 研修生：教職履修有
○司書としての基本的な知識 ○幅広い知識と知的好奇心 ○子ども、教員とのコミュニケーション能力 ○何が求められているか汲み取る力 △細やかな配慮 △向上心と応用力 △視野の広さ	○教養、司書としての基本的な知識 ○児童、生徒、教員、地域の方々とのコミュニケーション能力 ○求められている資料を探し出し提供する能力 △責任感 △子どもと教育に携わる自覚 △子どもの目線に立って物事を見る能力 △子どもの接し方などの知識、経験 △子どもの言葉を聴き、理解する力

つづいて、2017年度に実施した調査結果について述べる。2016-17年に参加した研修生A、B、C、Dの活動報告書をもとに、筆者らが研修生の気づきをキーワードもしくはフレーズで抽出した。児童の育ちを意識し

た意味内容の文脈ごとにコーディングを行い、キーワードをカウントして、司書課程のみ履修している研修生と司書課程と教職課程を履修している研修生の傾向についての検討を行った。なお、A研修生は司書課程のみ履修し、B、C、D研修生は司書課程と教職課程を履修している研修生である。結果は、A研修生10回、B研修生25回、C研修生34回、D研修生36回であった。

上述の結果と同様に、教職課程履修の有無に違いがあることが明らかとなった。司書課程と教職課程を履修している研修生では、司書業務に加え児童の育ちを意識した記述が多く見られた。一方、司書課程のみを履修している研修生では、児童の育ちを意識した記述は見られるものの、司書業務を中心にいた気づきのほうが多く見られた。

## 5. 考察とまとめ

本章では、第4章の結果をふまえ、司書課程を履修している研修生が、新しい学習指導要領に示されているような各教科学習等に必要な情報や資料を提供することができるか、また、先端技術の導入によりデータベース化、電子資料を含む多様な図書資料を管理できるか、プログラミング教育等、情報メディアを利活用した授業に対応できるかという観点から考察した。

当該インターンシップ研修生の場合では、司書資格に加え情報教諭免許の資格取得者である研修生と司書課程のみを履修している研修生では、「児童の育ちを意識した視点」での差異が見られた。司書課程のみを履修している研修生であっても「学校司書モデルカリキュラム」に対応できると思われるが、情報教諭免許も履修している研修生のほうが、より授業支援への貢献が高いであろう。貢献できる理由は、研修生が記述した授業支援の内容から明らかである。ICTを活用した授業に参加したC研修生の記述では、“大学で学んだプログラミングやICTに関する知識が学校司書としてICTの授業に活かすことができると感じました。専門能力だけでなく、+αの付加価値の必要性が、今回のインターンシップを通して具体的にイメージすることができました。”と示されている。また、D研修生の記述では、“学校司書になるためには、本だけではなく全体的なメディア、デジタルアーカイブなども使用できるようにならなければなりません。授業に参加し児童にアドバイスができたことで……（中略）……学校司書としてICT能力を使用した授業支援がどのようにできるかイメージすることができました。今後、学校司書がICTの技術を習得することで能力の幅が広がり、より児童が情報を扱えるような授業支援ができる”と、大学での学びが活かされたと感じている。こうしたICT機器を活用した授業は、DAISY図書（児童書の電子書籍）を始め、特別支援教育にも貢献できるといえよう。

さらには、今後の教育の方向性としてSociety 5.0に向けた学び方改革において、教員の役割が「同一内容だけ」児童生徒に教える教育から、「個々人の特性」に応じた指導方法へと転換が求められている。これに応じて“「教師だけ」が指導に携わる学校から、教師とは異なる知見を持つ”（p. 11）専門スタッフと協働した「チームとしての学校」へと、一元モデルからの脱却に向けた取り組みが示されている。こうした教育改革に合致した本稿の授業では、教員と学校司書が授業づくりの段階から単元の目標を意識している。研修生はこのような授業を参観するなかで、児童の集中力が高まることを確認している。専門スタッフである学校司書がTTとして授業に参画することで、教員が児童と向き合う時間がふえたとの気づきである。したがって、研修で実施されている授業支援は、専門スタッフと協働した「チームとしての学校」に向けた学び方改革に貢献していることが明らかとなったといえよう。

その一方で、研修を通して難しかったことや改善したいこととして、研修生は授業支援での選書が難しかったことや児童書の知識が足りないことをあげている。さらに、研修生は大学での授業を振り返り、公共図書館の勉強はしているが学校図書館の授業が少ないため、単元に沿った本を選ぶことが難しかったと述べている。確かに「学校司書モデルカリキュラム」においても読書指導はあるものの、児童書そのものについて触れられていない。幼小連携での読み聞かせや各学年で提供する資料は、発達段階を意識すると共に、教科の単元目標

に沿った資料でなくてはならない。児童生徒の言語活動に繋がることを鑑みると、今後の検討課題であることを指摘しておきたい。

また、業務改善の必要性について学校司書が在駐していない学校図書館では、図書館機能の根幹に関わる資料の管理すらできていない可能性があることを研修生は疑問に思っているという記述が見られた。公教育の学校で児童生徒や教職員に対して、図書館サービスに格差が生じてしまうことへの研修生の戸惑いの声である。文部科学省が実施した「学校図書館の現状に関する調査」(2016)では、全国的に学校図書館整備や学校司書の配置をめぐる状況に格差が見られる。学校司書の配置は「置くよう努めなければならない」と努力義務であるためその配置率は、小学校 59.2%、中学校 58.2%、高等学校 66.6%である。この配置率の差は、研修生が戸惑いを感じている学校図書館利活用の差となって現れるのであろう。

研修最終回での振り返りでは、研修生の切実な思いと受けとられる内容が述べられた。第1回目の研修では、学校司書の仕事に対する研修生からの前向きな質問が寄せられた。しかし、研修生は最終回での振り返りで「学校司書は誰を対象にしている仕事ですか」と勤務状況について戸惑う質問を寄せている。この質問は研修生が就職を意識してインターンシップ研修に参加していることから考えると当然であると思われる。こうした研修生からの「学校司書は職業として就職に繋がらない」との、冷やかな声も受けとめる必要がある。米谷(2016)は“学校司書には、性別役割分業の考え方が絡まって根深い問題をもたらしている”と指摘しており、学校司書が女性の多い職種であることと関係していると考えることができる。この性別役割分業の考え方は、仕事・家族・教育という3つの異なる社会領域を特徴とする「戦後日本型循環モデル」(本田, 2014)からも理解できよう。

諸大学での学校司書養成が始まっている今、現職の学校司書のリカレントはもとより、次の世代を担う学生たちに寄り添った出口の確保が急がれる。たとえ学校司書の仕事に魅力を感じたとしても、職業として成立しえない学校司書の仕事では断念せざるをえない状況である。本稿で取りあげたインターンシップ研修は、TECの喫緊の課題でもある現職学校司書の円滑な世代交代である。学校司書の人材確保という面からも“戦後日本型循環モデルの呪縛に囚われず、むしろそこからの脱却や変革を意図的に志向し、力強く行動”(本田, pp. 52-53)するならば道は明るい。

以上のように、実習報告書の分析考察から、研修生がICT機器を活用した教科学習や各教科等に必要な情報や資料を提供できることが明らかとなった。ただし、児童書に関する知識はいまだ不足していることもわかった。児童書は児童生徒の言語活動にとって重要であるため今後、「学校司書モデルカリキュラム」においても検討が必要であろう。また、授業支援や地域学校共働本部との連携による体験活動を通して、学校司書にとって必要な能力はコミュニケーション能力であることを確認した。学校司書の人材育成は、各自治体だけの問題ではなく公教育全体の問題である。教育格差とならないための改善策が急がれる。

学校司書の養成は始まったばかりである。本稿での課題をふまえ、引き続きデジタルメディアに強い図書館員や学校司書の養成を行っていききたい。今後の方向性として、教育活動に寄与する学校司書養成を展開するため、本研究結果をふまえて「学校司書モデルカリキュラム」に沿った研修のしおりに変更することも検討していきたい。

## 謝 辞

本稿をまとめるにあたり、豊田市教育委員会、ご協力くださった学校関係者のみなさまに感謝申し上げます。

## 注・参考文献

- 伊藤真理 (2016). 「愛知淑徳大学人間情報学科における学校司書養成への取り組み」. 愛知淑徳大学論集—人間情報学部篇, 第6号, pp. 29-37.
- 学校図書館担当職員の役割及びその資質の向上に関する調査研究協力者会議 (2014). 「これからの学校図書館担当職員に求められる役割・職務及びその資質能力の向上方策等について (報告)」.  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afiedfile/2014/04/01/1346119\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2014/04/01/1346119_2.pdf), (参照 2018-11-4).
- 学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議 (2016). 「これからの学校図書館の整備充実について (報告)」.  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afiedfile/2016/10/20/1378460\\_02\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2016/10/20/1378460_02_2.pdf), (参照 2018-11-4).
- 川原亜希世 (2018). 「図書館員の養成と研修」. 図書館界, 日本図書館研究会, Vol. 70. No. 1 (通巻 400 号), p157-167.
- Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース (2018). 「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる, 学びが変わる～」.  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/other/detail/\\_icsFiles/afiedfile/2018/06/06/1405844\\_002.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/_icsFiles/afiedfile/2018/06/06/1405844_002.pdf), (参照 2018-11-4).
- 中央教育審議会 (2015). 「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について (答申)」.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afiedfile/2016/02/05/1365657\\_00.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiedfile/2016/02/05/1365657_00.pdf), (参照 2018-11-4).
- 中西由香里 (2016). 「学校司書養成プロジェクトの活動と評価—豊田市学校図書館におけるインターンシップ—」. 愛知淑徳大学論集—人間情報学部篇, 第6号, pp. 39-50.
- 本田由紀 (2014). 社会を結びなおす教育・仕事・家族の連携へ. 岩波書店, p. 41.
- 米谷優子 (2016). 「「学校司書」雇用の課題—公立及び私立校の学校司書募集記事から雇用の課題を再考する—」. 日本図書館情報学会研究大会発表論文集, 日本図書館情報学会, 第64回, p. 62.
- 文部科学省 (2018). 「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)」.  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afiedfile/2018/05/07/1387017\\_1\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2018/05/07/1387017_1_2.pdf), (参照 2018-11-4).
- 文部科学省 (2018). 「教育振興基本計画 平成 30 年 6 月 15 日閣議決定」.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/keikaku/detail/\\_icsFiles/afiedfile/2018/06/18/1406127\\_002.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_icsFiles/afiedfile/2018/06/18/1406127_002.pdf), (参照 2018-11-4).

【資料編】

資料1 2016年度インターンシップ活動内容

回	日時	場所	内容
	4月26日 9:30～11:00	教職員会館	・インターンシップ研修内容の確認 ・日程決定
1	5月20日 9:30～15:00	T小学校	(ア)学校司書に求められている役割、職務の確認 (ウ)学校司書の仕事を知る (ク)校内見学
2	6月23日 10:00～15:00	T小学校	(エ)「テーマ展示」選書準備、書架整理 (カ)4年生国語「みんなで新聞をつくろう」 学校司書のTTでの授業支援を学ぶ
3	6月30日 10:00～15:00	T小学校	(イ)新刊検品 (エ)「テーマ展示」掲示作成 (オ)読み聞かせ体験
4	7月21日 10:00～15:00	T小学校	(ク)学校図書館の裏方としての仕事 蔵書点検、除籍、書架移動、装備、
5	7月31日 11:00～12:00	豊田市役所	(キ)中間面接（指導主事参加） これまでの活動報告と今後の改善点について
6	7月31日 13:30～16:30	豊田市 図書館	(ケ)コミュニケーションのとり方を学ぶ (コ)豊田市中心図書館児童コーナーでレファレンスを学ぶ
7	8月25日 10:00～15:00	T小学校	(ア)図書館書架の移動 (ア)ボランティアさんとの連携（読み聞かせについて相談） (イ)所蔵登録変更、請求記号の貼りかえ (エ)展示の入れ替え
8	10月13日 10:00～15:00	T小学校	(エ)掲示物作成 (カ)2年生生活科「食」授業支援 (カ)4年生社会「自動車産業」授業支援
9	10月27日 10:00～15:00	T小学校	(ア)本の帯整理（授業の参考資料として準備） (エ)展示の入れ替え
10	11月25日 10:00～15:00	T小学校	(イ)新刊検品 (カ)特別支援教育について DAISY 図書について (サ)「学校司書の仕事」振り返り

資料2 2017年度インターンシップ活動内容

回	日時	場所	内容
	4月28日 9:30～11:00	教職員会館	・インターンシップ研修内容の確認 ・日程決定
1	5月25日 9:30～15:00	T小学校	(ア)学校司書に求められている役割, 職務の確認 (ウ)校内見学 (ケ)コミュニケーションのとり方を学ぶ
2	6月8日 9:30～15:00	T小学校	(ア)5年生「社会:地理」学習支援資料準備 (オ)読み聞かせ体験 (カ)図書委員会の活動に参加(委員会支援の方法を学ぶ)
3	6月22日 9:30～15:00	T小学校	(ア)相互貸借(学校図書館, 公共図書館) (カ)1年生「国語」幼小連携読み聞かせ練習参加 学校司書のTTでの授業支援を学ぶ (カ)授業を参観して資料の使われ方を学ぶ
4	7月6日 9:30～15:00	T小学校	(エ)夏休みの課題に合わせた展示(ポップ, 掲示, 飾り) (ク)学校図書館の裏方としての仕事 蔵書点検, 除籍, 装備, 統計, 発注
5	8月16日 12:00～13:00	豊田市役所	(キ)中間面接(指導主事参加) これまでの活動報告と今後の改善点について
6	8月16日 13:30～16:30	豊田市 図書館	(ケ)コミュニケーションのとり方を学ぶ (コ)豊田市中央図書館児童コーナーでレファレンスを学ぶ
7	9月7日 9:30～15:00	T小学校	(イ)装備, 新刊検品 (エ)「防災」展示 (エ)コーナーづくり掲示物作成
8	9月26日 9:30～15:00	T小学校	(エ)秋の掲示物作成 (オ)読み聞かせ (ケ)コミュニケーションのとり方を学ぶ
9	10月6日 9:30～15:00	T小学校	(ア)4年生「国語:新美南吉」資料準備, ワークシート作成 (イ)装備 (ク)1年生の学級文庫入れ替え
10	11月10日 9:30～15:00	T小学校	(カ)4年生の授業を参観「プログラミング」 (カ)学芸会の練習を振り返る授業を参観 (ケ)子どもたちと触れ合う 運動場で遊ぶ
11	12月1日 9:30～15:00	T小学校	(エ)クリスマスをテーマとした展示 (エ)ワクワクする冬の立体掲示物作成(雪の結晶) (カ)3年生のICTを活用した授業を参観 初めてのパワーポイント
12	1月19日 9:30～15:00	T小学校	(ア)低学年図書館の配置換え ボランティアさんとの連携方法を学ぶ (サ)「学校司書の仕事」振り返り